書　評

稲垣恭子著

『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』

渡　部　　充

1899（明治32）年の高等女学校令によって制度化された女学校は、その後の拡大・発展に伴い、独特な「女学生文化」を生み出すこととなった。本書は、そうした女学校や女学生たちの在りし日の姿を、卒業生たちへの聞き取り、実際にやり取りされた手紙、同時代の文献などを用いて多角的かつ鮮明に描き出したものである。男たちの通った学校の歴史を「表の教育史」とするなら、これは旧制高等女学校の歴史を中心に、明治・大正・昭和期の女子教育のあり方とその社会的意味を捉えようとした「裏の教育史」とでも呼べる試みであろう。同じ中公新書からは2006年に佐藤八寿子著『ミッション・スクール』（本誌前号で書評させていただいた）が出版されている。本書はそれに続く労作である。神戸女学院もしばしば言及されていることもあり、また、今日の女子大生や女子大における教育を考える際にも示唆に富み、大変興味深く読むことができた。畑違いの評者ではあるが、本書の内容を紹介し、最後に評言を試みたい。

長めの序章「女学生とは」は本書全体の要約でもある。「国語好き」で「裁縫嫌い」、ピアノや茶道、華道などの稽古事にも熱心だった女学生の姿が日記などにより活写されている。当時の女学生が用いた隠語の数々は、少女たちが言葉に対する独特な鋭いセンスをもっていることを物語っている。「ヤンキー」は「お転婆」という意味だったが、「（前略）女学院の子はヤンキーで、お行儀が悪くて車中で騒いでいた、と時々同窓生から苦情がきてチャペルの礼拝のと

きに全学院が注意される」(36) という『神戸女学院ものがたり』からの引用には苦笑した。(「ヤンキー」には「アメリカかぶれ」のようなニュアンスもあったのだろう。)

第一章「文学少女」以降、本書の中核をなすのはさまざまな女学生の類型とそこに向けられた批判のまなざしである。「文学少女」は今や絶滅危惧種であるが、かつては「時代の先端を行く『ハイカラ女学生』の別名」であったという (42-43)。良妻賢母教育を旨とする高等女学校においては、小説読書は「不正の読書」(51) として禁止されることが多かった。女学生が恋愛小説などを読むのは虚構と現実を混同し、堕落の道に入るきっかけになりかねないというわけだ。そうした文学による堕落のイメージを増幅したのが田山花袋『蒲団』の主人公、芳子である (54)。しかし、1910年代に次々と創刊されていった少女雑誌や婦人雑誌は女学生の読書熱をますます煽ることとなった。小説の社会的地位が上昇したこともあり、1920年代以降は「文学の教育化と教育の文学化」(60) が進んでいったのである。読書調査などでも成績のよい学生ほど多くの本を読んでいることが判明した。また、「読書好き」は「文学好き」とほぼ同義であった。「文学少女」は「中流以上の女性にふさわしい教養と女性らしさを備えた文化階層を表示するもの」になったのだ (62)。肯定的イメージの一方、文学に耽溺する女性は理知的、分析的思考力に欠ける「エモーショナル」な存在という否定的イメージでも捉えられていた。感情豊かな女らしい存在という見かたと、情感や気分に左右されやすい「センチメンタル」な存在という見かたが共存したのである (78)。

第二章「女学生の手紙の世界」は他章と異なり、類型ではなく、女学生が頻繁にやり取りしていた手紙の実例を示しつつ、その生活世界に迫ろうというものである。今日同様、女学生にとって「友だち」のグループに加わることは大変に重要な意味をもっていた。そうしたグループ内での親密な関係性が些細な事柄に関する情報やその時々の感情の共有によって確保される。手紙といっても郵便によって送付されるとは限らず、「書いた手紙を相手の家まで渡しに

行って、そのまま何時間も話をした」り、下駄箱に入れたり、「授業中に渡したり」されることもあったという（87）。手紙は特定の相手と二人だけの濃密でロマンティックな関係を媒介することもあった。主として上級生と下級生の間に築かれる特別な関係は、“Sisterhood”の頭文字から「エス（S）」と呼ばれたが、1920年代から30年代にかけて、「エス」をめぐる言説空間が成立した（105–108）。男性同士の関係が「身体性」と結び付けられることが多かったのに対して、女学生同士の関係は、身体性を排した精神的な「清い」関係であると強調する傾向が見られた。厳しく禁止する学校と、容認する学校に分かれていたというが、やがて思春期の女子に起こりやすいプラトニックで淡い感情とする見かたが一般化した（108）。アメリカの女子大学においては「性的倒錯」「異常」として排除されていった関係だが、日本では異性愛に至る前段階として容認されたのである。アメリカの場合、それが社会的連帯につながり、異性愛に対する脅威となりえたのに対して、日本の場合、異性愛の優位を揺るがすものとは見られなかったと分析されている（113–14）。女学生の手紙は、今しかないという現在志向の時間意識の中、現実とは「やや距離をとった理想的な世界を創出」（117）した。そうした世界は、卒業後の彼女たちが「現実」を読み解くコードとしても機能したという。

第三章「堕落女学生・不良少女・モダンガール」では女学生に対して向けられた批判的まなざしが表出したさまざまな類型が描かれる。田山花袋の『蒲団』や小杉天外の『魔風恋風』などは、新時代の理想を求めながらも恋愛や性関係によって「堕落」するヒロイン像を提示した。一方、1900年から1910年代にかけて新聞や雑誌に「女学生堕落論」が数多く登場することになる。そこでは、「都会の誘惑」「下宿の危うさ」などが議論されたが、女学生の「虚栄心」が特に問題視された。また当時、続々と設立された私立学校の問題とも関連付けられた。そうした私立学校の多くは営利目的の「似非女学校」あるいは「悪女学校」であると非難されたという（132）。「堕落女学生」は良妻賢母主義の教育から排除されるべきものとして作り出された表象でもあったが、「『ハイカラ』

ぶって洋書を持ち歩いたり小説や演劇の批評をしたりして『生かじりの学問』を誇示するほど、その底の浅さが見えてしまう」と厳しく非難されたのである(134)。少女雑誌、映画、宝塚歌劇などの都市大衆文化が浸透するに伴い、女学生文化の一部ともなっていったが、同時に「軽佻浮薄」なものとして問題視された。映画館、劇場、カフェー、喫茶店やダンスホールといった場所への出入りは厳しく管理され、そうした場所は女学生を「不良化」する誘惑の温床と見られていた(142)。1920年代後半から1930年代にかけて注目された「モガ」すなわち「モダンガール」もまたそうした新風俗を身にまとった新しいタイプの「不良少女」であった。実際の調査によれば男子中学生と比べて「不良行為」に走る女学生は極めて少なかったのだが、都市大衆文化に対する教育者の不安を映す表象として「不良少女」はクローズアップされていった(147)。しかし、禁止されていた小説読書が教育課程へ取り込まれていったように、大衆モダン文化も女学生の無害なサブカルチャーとして受容されるようになった。

第四章「ミッション女学生」の内容は佐藤著『ミッション・スクール』と重なるところが多い。ハイカラとモダンを体現するものとして憧憬の的であった「ミッション女学生」は、同時に「西洋かぶれ」の象徴として激しい攻撃も受けた。1890年代にはそうした非難によって多くのミッション女学校が生徒数を激減させたという。神戸女学院も200名近くいた生徒が辛うじて100名を保つ程度になったと紹介されている(172-73)。そうした中、「良妻賢母主義」と「教養主義」を折衷した「女学」を理念として明治女学校が創立された。「女学」とは和洋の教養に伝統的な「たしなみ」を合わせたものであり、「西洋化」対「日本化」、「実用知」対「リベラル・アーツ」の葛藤を解消しようとしたものでもあった。しかし、明治女学校は「社会状況から距離をとった自由な思索を可能にしてくれる場所であると同時に、社会的な現実に対しては無力な隔離された場所」であった(182)。一方、多くのミッション女学校は「良妻賢母主義」を柱に掲げた高等女学校令の公布以前から良妻賢母教育を取り入れていた。例えば本学の入学案内には「他日良妻賢母たらしむる事を期す」とあり、生け花、

茶の湯、箏曲、作法などが随意科目として設置されていた（185）。ミッション女学校はキリスト教主義によるというより、その校風によって選択されることの方が多かったという（191）。ミッション女学校のブランド・イメージを構成していたのは女学生に人気のあった「英語（外国語）」と「ピアノ」の二科目であった。

終章「『軽薄な知』の系譜」は1905年『中央公論』誌に掲載された紅鹿子の「女子大学」からの引用で始まる。紅によれば「実際女子大学にある一千余命の女子は、大学なる名に憧れて集つたのである。此ヴニチーが身を誤まる第一の階級である、女子大学生の名を便りに男子の注目を惹かう、忌憚なく云へば惚れて貰はうとの野心がある」（208に引用）とのことだが、ここでも女学生の虚栄心（ヴァニティ）が非難の的となっている。「女学生文化」とは、旧制高校的な男の「教養主義文化」、雑誌、映画、ラジオなどが媒介した「大衆モダン文化」、伝統的な茶道、華道などの「『たしなみ』文化」の三者いずれをも含む。しかし、何ひとつとして深く追求することのない「軽薄な知」であると揶揄されてきたのだ。良妻賢母主義教育からの逸脱者としての「文学少女」や「堕落女学生」、内面重視の人格形成を目指す男の「教養文化」に対置される、外面的で虚栄に満ちた「不良少女」や「モガ女学生」の大衆文化、こうした類型的イメージは、そもそも西洋文化受容が折衷的であった近代日本の教養層の「自己嫌悪」が生み出したものであったと著者は見ている。そうした批判は戦後の「女子学生亡国論」につながり、今日まで続く大学の「大衆化」「レジャーランド化」の議論の中で「女子大生」はそれを象徴する格好の素材として利用されてもいるのだ（224-25）。

以上、本書の中心をなすのは、女学生や女学生文化に向けられた非難、批判のまなざしは、折衷的な西洋文化受容をせざるを得なかった男性中心の近代教養文化に内在する「自己嫌悪」のまなざしであったとするものである。これは佐藤著『ミッション・スクール』におけるものと同種の議論であり、なるほどと思わせる一定の説得力は有している。しかしながら、主に各章の末尾で展開

されるそうした議論には、批判した側に対する論考・論証や、佐藤には見られた理論的な枠組みによる分析には乏しい。

今日、「文学少女」はほぼ死滅した。「漫画少女」「演劇少女」「宝塚少女」「やおい」「腐女子」などがそこから「進化」してきた類型であろうか。かつて女学生の間で親密にやり取りされていた手紙は、携帯電話で頻繁に交わされるメールになった（現在志向の女学生が書き残した手紙は後代の研究資料となったが、メールははかなく消えていくのみであろうか)。「堕落女学生」や「不良少女」は「援交女子高生」や「キャバクラ女子大生」へと「発展」したなどと言うとちょっと乱暴だろうか。「モボ女学生」の現代版はファッション雑誌に登場する「読者モデル」の女子学生たちである。「ミッション女学生」は、少女小説や少女漫画でノスタルジーないしパロディの対象として消費されるイメージとして生き残っている。今どき「あり得ない」その超俗ぶりが読者の微かな笑いを喚起するキャラになるのだ。いずれの類型も今日では発展的に解消されたといえるだろうが、彼女たちが担っていた女学生文化は、姿を変えて今なお受け継がれているようにも思われる。

「あとがき」によれば著者の母親は女学校出身の「万年女学生」であるという。そうした母親の体現する女学生文化に対する「アンビヴァレントな思い」が本書執筆のきっかけかもしれないとある。私事で恐縮だが、評者の母親も高等女学校を卒業した「万年文学少女」である。その世間離れした感覚に面食らうことも多いが、家にあった決して少なからぬ量の文学全集の類はすべて母の蔵書であった。TV でタイガースの応援ばかりしていた父と、家事の合間をみつけては新刊の小説に読みふけっていた母、どちらの背中を見て育ってしまったか（良くも悪くも）は明白である。男たちの「教養主義」に対置され激しく非難された女学生文化だが、彼女たちが文化的資産の次代への継承者としての役割も果たしていたことは否めないだろう。

卒業後しばらくは就職しても、結婚すると専業主婦におさまることが多かったと推察される女学生は、男女共同参画社会の理念からすると否定されるべき

存在かもしれない。その生涯の大部分を経済的な生産活動に従事することなく、中年あるいは老年になっても「少女趣味」を温存できる徹底して消費的な存在。その文化は明治以来専ら男たちが営々と築き上げてきた経済的豊かさという土壌に咲いたあだ花と捉えることもできよう。しかしながら、漫画やアニメーション、10代女性のファッションやメイクなど今日世界から注目を浴び、何かと持ち上げられることの多い「クール・ジャパン」のサブカルチャーのかなりの部分は、必ずしも学生に限らないだろうが、若い女性たちが生み、育て、継承してきたものであり、女学生文化と通底しているだろう。

本書各章に引用されている、「虚栄的」で「浅薄」で「非実用的」な女学生文化に対する批判の言葉に首肯することは多かった。その一方で、評者は「無用な」ことばかり教えている「堕落教師」でもある（「『碌に読みもしない泰西文学』などを新しがって講義したり」（141）という本書中の引用にはヒヤリとさせられた）。かつての女学生が体現した（と表象される）「無用な知」に、何らかの肯定的意義を見出したくなるのは、著者同様、女学生文化に対して「アンビヴァレントな思い」を抱えているからだろうか。

（中公新書、2007年２月、本文246頁、本体780円＋税）